

所感 : 論説

著者	戸澤, 正保
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 9
ページ	1 - 6
発行年	1919-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/6446

所 感

教 授 戸 澤 正 保

雜誌部委員の御依頼で、何か書いて見ることにしたが、内々聞けば、今月號は原稿が潤澤で餘白が尠いとの事、是れ頼うてもなき幸と、左に極短いものを書いて責を塞ぐこととする。

此度の世界大戰の結果は未だごん底まで分つた譯ではないが、今迄に分つた所でも、隨分色々の感動を與へる、中に就て、誰でも感ずるべき筈であると思はれる、重大なる二三の點に就て、私の所感を述べて見ようと思ふ。

思 潮

自然の威力は偉大なもので海洋の潮流の如きも人力を以てしては如何とも爲難きものゝ一である、自然界の此威力に相當するものを人間界に求むれば、所謂思潮であらう。昔し支那で民の口を塞ぐは、河を塞ぐよりも甚だしと云つたのも、當時既に此思潮の威力を認めたのに外ならぬが、此度魯西亞が倒れ獨逸が潰いたのを見ると、今更のやうに此威力の絶大なのに呆れざるを得ぬ、此人間界の潮流の前には、帝國も軍國も秋風の枯葉を捲くが如くに吹飛ばされたのである、古來革命といふ革命は、皆之と同様の筋道を辿つたのに相違ないが、眼前に見せつけられると格別に深い感動を與へられる、之を思ふと世の政治家志士乃至教育家などの、瞬時も忘れてならぬのは思潮であるべき筈である、併し往々忘れられる、閑却せられる、それはどういふ譯か、思潮は壘の中に或は蒲團の中に燃ら擴がつた火の如く、爆發する迄は表面に現れぬからである、

一代の學者の言論必ずしも之を表はさぬ、否な學者の研究は、大抵既に起りたる、或は存在せる事物に就ての研究であること、恰かも動物學者の動物に於ける、言語學者の言語に於けるが如きを本分とするからである、又議會に於ける言論も、必ずしも思潮に觸るゝものでない、其他上流社會、知識階級、官吏社會などに寧ろ思潮を風馬牛視し、若くは殊更に閉却せんとするの傾向を見るのが常であらう、そんなら思潮は何處に潜むかといふ問題になる、私の考では寧ろ一般青年の傾向、文士の作、勞働者の聲等に無意識的に宿るものと思ふ、蓋し此等の徒は社會の上層に出でずして、下層中層の燻りの中に起臥して居るので、早く火の臭氣を傳へるのであらう、而して此燻りこそは、一代の文明の積弊社會制度の欠陥等の沈澱物が醗酵したもので即ち新思潮の酵母に外ならぬのである。支那には童謡といふことがあつたが、三文文士の作貧民の愚痴等は今日の童謡ともいふべきで、共に天に口なし人をして云はしむるものと見るべきであらう、尤もこれは國內にあつての思潮である、此外に外來の思潮がある、而してこれが尤も恐れられて居る、併し私の考では外來の思潮は内在の思潮と共鳴する所があつて、初めて恐るべき爆發の口火となるのである、若し兩者の間に共鳴がなければ、外來の思潮必ずしも恐るゝに足らぬ、只だ同じ様な人間が同じ様な文明の下に住んで居る場合は、内在の思潮は外來の思潮と甚だ相近き親族性を有し勝であらうと思はれる、具體的の一例を擧ぐれば君主に對する恐るべき外來の思潮の如きは、我國の内在思潮と聊かも共鳴する所がないから、少しも恐るゝに足らぬ、併し上流に對する下流、資本主に對する勞働者、富者に對する貧者等の政治的社會的乃至經濟的の平等を要求するが如き外來思潮は、我が内在の思潮にも屹度共鳴する所があると思ふから、これは幾重にも要慎をし研究するの必要がある。時務を知るは俊傑なりとは、正しく右に述べたやうな思潮問題に通曉す

るを意味したものと解すべきではなからうか、然るに時務家たるべき筈の政治家乃至吾々教育家など迄が、相率ゐて時務家を以て俊傑たらんとしつゝあるは従來の傾向であつた。以後は何卒思潮の洞察を以て第一義となし、第二義的の形式、方便、手段等の末に奔る、所謂刀筆の吏たるのみに甘んぜざるやうにしたいと思ふ勿論我々の日常作業の七八分は第二義的のものであるから、決して之を粗略にせよといふのではない、たゞ其上に第一義的のものがあることを忘れてはならぬといふのである。

理 想

従つて個人の修養としては、思想の修養が第一である、専門の學問に没頭するは宜い、大に宜い、たゞ之を統括する思想あるを忘れてはならぬ、或は思想は動くものである、思想は變るものである、従つて當てにならぬものであるといふかも知れぬが、動くもの變るものなら尙更修養の必要がある筈だ、概して云ふと思想と雖も進化するものであるから、一處に停滯して居る事はない筈だ、併し徒らに世間の思想即ち思潮に雷同してはならぬ、之が尤も善き對應策は、飽くまで己れの思想を高上せしむるにある、即ち理想——野心の意味にあらざる——を作るにある、理想こそは間違のない羅針盤である、昔の仁義今の正義といふ語の如きは何れも理想若くは其の方針を示したものである、凡ての作業凡ての努力は此方針の下に經營されねばならぬ然らざれば畢竟失敗に終るは明である、戦争でさへさうである、無名の師は克たぬといつたのはこゝである。英米佛等の軍に果して此理想があつたか、世を欺く爲めの偽善的呼號ではなかつたかといふやうな疑を抱く人もあるやうである、政治的經濟的の顧慮より、名を正義に假りたりといふ説もよく聞く處である、實際其様な顧慮も政略もあつたに相違ない、併しそれは一部分の少數人民の間に過ぎぬ、此等國民の大部分は實際

正義の爲めと確信して働いたのも事實である、人間最大の努力は、利益や偽善の爲めに出るものではない、自利私益を離れた崇高雄大の衝動に依つて、初めて人間は人間以上の仕事を爲し得るものなのである、日清日露の役の如きも、當時の當局者は如何なる考を有せしとも、國民の多數は潔白なる理想に依つて働いて、その爲めに彼の通りの効果を收め得たのであると思ふ、又或人は此度の戦争は正義や理想が勝つたのではない、科學が勝つたのであるといふ。併し科學も正義には負けたと見る方が正しい見方であると思ふ、科學其者は勿論不偏不黨で、負けても勝つても其價值に影響するものではないが、人生との交渉から考へれば、理想に支配せらるゝは免れぬ事である。

個人 の 價 値

次に切實に感ぜられることは個人の價值を高めねばならぬといふことである、歐羅巴に行く者の凡てが第一に感ずることは、彼等の個人的價值の高いといふことであるさうだ、我國民は國民全体としては可なり偉いと云はれて居る、併し個々の價值は低いと云はざるを得ぬ、これは何を意味するか、國民を率うる小數には可なり具眼者も居るが、率られる大多數は盲目的に服従するに過ぎぬといふことを意味するのである、これまで先づこれでも宜かつた、今後はそれでは心細い、國民の各個体に曲りなりにも國民を代表する程の價值を有たせたい、己れ一人は一平民だから、どうでも宜い、お上でどうともして呉れるだらうといふやうなことを云はずに、各個人が小國家となり濟すのである、さすれば權利義務の自覺も完全に出来る筈だ、此自覺より自發的に出づるのでなければ、忠國愛國も完全とは云へぬ、軍紀の如きも同様である、外壓的の愛國心や軍紀が果して何時迄役に立たう、民本主義といふも此自覺あつての上の話である、其代り英雄豪傑と

いふ者の性質は變つて來る、これからの英雄豪傑は個人の團體の代表者であらねばならぬ、エマーソンの偉人は民衆の代表者との語は此に至つて意味を深うする。米のウヰルソン、英のロイド、デヨーヂ、佛のクレマンソーといふ如き人物は、此意味での英雄豪傑であらうと思ふ、それにつけても偉人の必要は益々増加する譯である。

東洋的疑惑

西洋人はよく東洋人の疑惑といふ様なことを云ふ、其意味は東洋人は人を信せぬ、従つて意中を有の儘に云ふの勇氣を欠く、簡單に云へば虚心坦懐ならぬといふことである、これは東洋人と云つて日本人をさした譯ではない、併し此評言には幾多の割引をして？、遺憾ながら若干の眞理があると認めねばならぬ、我々は教育ある中流以上の人でも、物を率直に云はぬ癖がある、従つて人の云ふ所を聞いても、其裏を讀まうとする癖がある、我々は蔭口をきくことの多い國民である、必要のない秘密を貯ふる國民である、欺かれまい瞞されまいといふ用心が餘りに嚴しい國民である、併し人を見たら泥棒と思へ的の探偵的覺悟は、決して人を大にし品位を高むる所以の道ではない、然るに新聞紙の記事などを見ると、此探偵的根性がよく露れて居る様に思ふ、併し今は我々も世界大國の仲間入をして、世界の治亂を、雙肩とは云へぬ迄も、片肩位には荷ふ身分となつたのである、謂はゞ今は世界の公人となつたのである、凡ての小國の根性を棄て、虚心坦懐の大紳士の品位を養はねばならぬこと、思ふ、さればといつて、歐米の大國は必ずしも君子國ではない、正義人道などいふものが、眞に完全に世界に行はれようとは、どうしても思はれぬ、併し正義人道だと信ずる處を行ふ國民でなければ、最後の勝利或は永遠の勝利を得ることは先づ出來ないと極つたやうに思はれる、權謀術

數も時に勝利を博することはあらう、併し國民全体が權謀術數を金科玉條としたらそれこそ亡國だ、此度の講和會議などでも下手な懸引をして小利を得るよりは、正々堂々の議論をして損をする方が、永遠の爲めには利益であると思ふ、併しこんな外交上の詳細の折衝などは私には分らぬ私は一教育家としての考を述べたるに過ぎぬ、が私は繰返して云ふ虚心坦懐、正々堂々、これ我等が今日に於て特に服膺すべき金言であると。

(八年一月末稿)

所謂新主義新思想

教授 田 中 義 能

前後五年の久しきに亘り、全世界を攪亂せる大戰亂も漸く終りを告げ、今や世界各國の代表者は、佛京に會合し、此の空古の大戰亂の總決算に忙殺せられつゝあり。而して此の會合が如何なる決議をなし、如何なる決算をなすかは、世界各國民の均しく熱烈なる注意を拂ふ所にして、吾人も亦我が國民として、我が國家の地位を向上すべき結果の將來せられんことを希望して止まざるもの也。吾人は是れと同時に翻つて我が國內に於ける、此の大戰亂に基く、總決算を試み、以つて將來の發展の參考に供することの極めて必要なるを認むるもの也。

然れども貿易出超の爲に、正貨十五億に達せることや、兌換券の發行十億を突破せることや、米の實收高五千四百萬石にて、國民の需要に幾何の不足を來たすかのことや、物價の騰貴を如何にして緩和すべきかの